

# 『ポーリーン』におけるP.B.シェリーの影響

吉 門 牧 雄

## はじめに

ロバート・ブラウニング (Robert Browning) が1833年3月に初めて出版した『ポーリーン：告白の断片』 (*Pauline: A Fragment of a Confession*) という作品は一種独特な性格を持ち、冒頭の部分は一見ポーリーンに対する劇的独白のように見えるが、実はそうでなく、語り手が告白の断片を記述して、それをポーリーンが読みフランス語の注釈をつけて公表した形になっている。<sup>1</sup> このポーリーンは語り手の告白を綴った草稿を校閲したという以外具体的な身体性はなく、むしろ「詩歌を体現した存在」として捉えた方が適切であると考えられる。<sup>2</sup>

さて、『ポーリーン』の中で、ブラウニングが「太陽を踏むもの」として呼びかけた相手がパーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) であることは批評家たちの意見が一致している。『ポーリーン』におけるシェリーの影響についてはフレデリック・A・ポトル (Frederick A. Pottle) の『シェリーとブラウニング』 (*Shelley and Browning*) などの先行研究があるが、この作品におけるシェリーの影響の意義はまだ十分に解明されているとはいえない。<sup>3</sup> この詩の中には、語り手がシェリーの影響を受けつつも、そこから脱しようとする動きがあるが、この論文では、『ポーリーン』においてシェリーはどのような存在なのかを論じつつ、シェリーとの関連において『ポーリーン』を捉えなおすことによって、この作品の新しい読みを提示したい。

## 第1章 シェリー作品との出会い

『ポーリーン』におけるシェリーの影響を述べる前に、ブラウニングがシェリーの作品に出会った経緯について述べたい。W. ホール・グリフィン (W. Hall Griffin) とハリー・クリストファー・ミンチン (Harry Christopher Minchin) によると、ブラウニングの母は組合教会の熱心な信者であり、死ぬまでの43年間教会に通い続けた。<sup>4</sup> 父は初め監督派教会に属していたが、妻の影響で組合教会に加わる。このような母の影響を受けて、ブラウニングも宗教的に熱心であったが、やがて反逆の時代を迎える。疾風怒濤の時代の彼の荒れた心を抑えることは、母親でもできなかった。そのころ、両親とともに教会に行ったブラウニングは、牧師の説教を拝聴したが、いささかも興味が持たず、欠伸をしているのを牧師から叱られたという逸話が残っている。また、フランス人の家庭教師からフランス語を学んでいるが、ヴォルテールの著作などを読み、合理性を重視するフランス啓蒙主義に触れている。

ブラウニングが15歳の頃、ある日、露店の本屋を通り過ぎていた時に、「シェリー氏の無神論的詩、非常に希少」と書かれた古本を見出す。本屋とのやりとりの中で、シェリーという名前の詩人が本当にいたこと、彼が他にも詩を書いていること、今は死んでいることが分かった。この本は

シェリーの『クイーン・マップ』（*Queen Mab*, 1813年）の海賊版で、特にその長い注は一部に賛成できない部分もあったが、イエス・キリスト、父なる神、国王、僧正、結婚を攻撃したものに、ブラウニングは心惹かれる。そこには、今まで読んだことのない新鮮な内容があった。

『ポーリーン』の中にも、シェリーとの出会いを描いたと思われる記述がある。

On one, whom praise of mine would not offend,  
 Who was as calm as beauty—being such  
 Unto mankind as thou to me, Pauline,  
 Believing in them, and devoting all  
 His soul's strength to their winning back to peace;  
 Who sent forth hopes and longings for their sake,  
 Clothed in all passion's melodies, which first  
 Caught me, and set me, as to a sweet task,  
 To gather every breathing of his songs.  
 And woven with them there were words, which seemed  
 A key to a new world; the muttering  
 Of angels, of some thing unguessed by man.  
 How my heart beat, as I went on, and found  
 Much there! I felt my own mind had conceived,  
 But there living and burning; soon the whole  
 Of his conceptions dawned on me; their praise  
 Is in the tongues of men; · · ·

(ll.405-21)

ある人にいき当たった。  
 私の賛辞が傷つけることがなさそうで、  
 ポーリーンよ、あなたが私に対してそうであるように、  
 人類に対しても美しいと同様に穏やかで、  
 人類を信じ、魂の力の全てを人類が努力の末に、  
 平安を取り戻すことに捧げている、  
 そんな人にいき当たった。  
 その人は熱情のメロディーに包まれた希望と、  
 それ自身を求める憧れを発出した。  
 その人は初め私を捕らえ、甘味な仕事に向かわせるかのように、  
 私に縛れをほぐさせ、詩歌から意味を集めさせた。  
 歌の中に織り合わされて、新しい世界への鍵と思われた言葉が潜んでいた。  
 それは、まだ人間には思いもつかない何か、天使の囁きだ。  
 なおも、そこに多くのものを捜し、見つけた時に、  
 いかに心が躍ったかを、魂が感じたと思った。  
 そこでのみ、生きて、燃えつつ！

すぐに、彼の着想の全てが私の上にあけ染めた。  
着想を賛美する声の人々の舌の上にあった。

ここで語り手が、目指すべき詩人のモデルとして選んだ「ある人」とはシェリーのことで、「新しい世界への鍵と思われた言葉」とは、シェリーとの出会いによって、『クイーン・マップ』等を読んで与えられた新しい着想のことであると考えられる。今までに出会ったことのない思想とそれを表現する言葉がそこにはあった。それは人間の発想を超えた「天使の囁き」のようであった。その囁きを聞きつつ、語り手は魂が燃え立つのを感じた。

その後、ブラウニングはシェリーにいいよ関心を持ち、16歳の誕生日の贈り物としてシェリーの詩集を親にねだり買ってもらおうとしたが、当時シェリーの名前はまだ一般には知られていなかった。しかし、ロンドンのヴィア・ストリートにあるチャールズ・オリアーという本屋で手に入ることが分かった。「運命の皮肉によって、それを買ってきた人は彼の敬虔な母であった。」<sup>5</sup>ブラウニングは母親にシェリーの作品を買ってもらい、『アラスター』(Alastor, 1816年)、『プロメテウス解縛』(Prometheus Unbound, 1820年)、『エピサイキディオン』(Epipsychidion, 1821年)、『ヘラス』(Hellas, 1822年)などを読み耽り大きな感化を受けている。

## 第2章 ブラウニングがシェリーから受けた影響

上述のようなシェリーの作品との出会いから、ブラウニングは大きな影響を受けているが、具体的にはどのような影響であったかについて述べていく。

### 第一節 菜食主義

シェリーの作品の中でも、特にブラウニングが最初に読んだ『クイーン・マップ』は彼に重大な影響を与えた。ブラウニングが菜食主義者となったのは、この詩の影響であると考えられる。シェリーの菜食主義は、本来あるべき自然の法との関係を問題としていた。つまり、繊細な感覚を持つ動物を犠牲にして食べることは、自然の法則に反するものであり、世界に災いをもたらす。しかし、人類の未来の理想的な世界では、「獅子さえ今や血への渇きを忘れ去り、恐れを知らぬ子山羊の傍に、太陽を浴びて戯れるのが見られる」(第八歌、ll. 124-6)とシェリーは指摘する。<sup>6</sup>

第八歌には、次のような重要な記述がある。

・ ・ ・ ・ ・ もはや人は  
己の顔を<sup>まとも</sup>真面にみる子羊を殺さず、  
残酷にもその肉を刻んで食ったりはせぬ、一昔は、  
食われたその羊肉が『自然』の法に背いた報復として  
常に人の肉体内にはそこなる腐った体液の全てに火をつけ、  
人の精神内には悲惨・死・疾病・犯罪の  
萌芽たる全ての邪悪な激情・無益な信仰・  
憎悪・絶望・嫌悪の業火を燃やしたものだが。

(ll.211-8)

未来の理想世界では、人はもはや動物を殺して食べることはない、ましてや愛らしい目で見つめる子羊を殺めることは不可能である。この個所についてシェリーは詳しい注釈をつけているが、その冒頭の部分を引用する。

人類の肉体的・道徳的性質の墮落は、彼の不自然な生活習慣に由来していると、私は思っている。人間の起源は、人間がその一部である宇宙の起源と同じように、不可思議な神秘に包まれている。人類の発生は始まりを持つか、あるいは持たないかである。双方の想定<sup>7</sup>の証拠の重さはまずまず同じであるように思われる。そして、それは想定された現在の議論にはまったく重要でない。しかし、ほぼ全ての宗教の神話によって語られる言葉は、遠い昔に人類は自然の道を捨て、不自然な食欲のために彼の存在の純粋性と幸福感を犠牲にしたことを証明しているように思われる。また、この出来事の起こった時代は、地球の気候に大きな変化があった時代でもあったようである。明らかに、この出来事は気候変動と一致している。悪の木の果を食べ、子孫に神の怒りと永遠の生命の喪失を永遠に固定したアダムとイブの寓話の説明は、不自然な食事から出てきた病気と犯罪という以外の説明は認めていない。<sup>7</sup>

シェリーの菜食主義は、自然の法に反した肉食が人類に不幸を齎したとする信念から出ている。このようなシェリーの菜食主義に影響されて、実際にブラウニングは2年以上もパンと馬鈴薯で暮らす<sup>8</sup>が、しだいに視力が衰弱してきて、やむなく菜食主義を捨てるに至っている。

## 第二節 無神論

シェリーの影響の中で最も重要なのは、無神論である。これにより、ブラウニングは一時期ではあるが無神論者になってしまった。ブラウニングが影響を受けたシェリーの無神論とはどのようなものであったか、その内容を詳しく見ていこう。シェリーの無神論の内容は『クイーン・マップ』本文と本部に付けられた詳細な注釈を読むと理解できる。「クイーン・マップ」の第七歌は無神論者の残酷な火刑の描写から始まる。アイアンシーの「魂」が幼い時の体験を回想する。彼女が幼い時に、母親は彼女を連れて無神論者の火刑を見に行く。黒装束の牧師が薪の周りに集まり、群衆が見つめる中、大胆な表情で罪人が通り過ぎた。やがて、火刑が始まるが、その時の状況をこう描いている。

飢えた火が逞しき彼の五体の回りを這い  
 決然たるその目をたちまち焦がし盲とすれば、  
 ついに、断末魔が彼の心臓を引き裂いた！  
 無感覚にも群衆が勝どきを挙げると、わたしは泣いてしまった。  
 母は言った、『娘や、泣くのはお止し！あの人は、  
 『神』なんぞ実在せぬ、と喋ったんだから』と。』

(第七歌 II. 8-13)

これに対して妖精である女王マップは、「『神』なんぞ存在せぬわ！／『自然』はその無神論者が断末魔の呻きによって信仰を／確かめたことを保証する」(II.13-4)と即座に答え、無神論者を擁護している。

上の引用で、女王マップが語った「『神』なんぞ実在せぬわ！」(l. 13)という言葉に、シェリーは詳細な注をつけて、彼の無神論を表明している。この注釈の元となっているのは、シェリーが学生時代に出した『無神論の必要性』(*Necessity of Atheism*, 1811年)というパンフレットである。この過激な内容が問題となって、シェリーは親友のトマス・ホッグと共にオックスフォード大学を退学に追い込まれている。

さて、この注釈は「神はいない」という主張を展開するものであるが、その前提としてシェリーは「この否定は、いつに創造者としての神に影響を与えるものと理解しなければならない。永遠に宇宙と共存する浸透する霊という仮説は、振るわれることなく残るのだ」と述べている。<sup>8</sup>「創世記」に記されているような、宇宙を創造した神は否定するが、宇宙にある種の力が充満していることは大いに肯定する立場を表明である。これは次のような詩行にも表現されている。

「自然の大霊よ！十全なる力よ、  
『必然』よ！御身、世界の母よ！  
人間の過てる信仰の「神」と違えば、  
御身は祈りも賛美も求めず、  
(第六歌、ll. 197-200)

この「自然の大霊」は宇宙に充ちるエネルギーであるが、人格神ではないので、人間に祈りや賛美を求めたこともない存在である。このような前提のもとで、宇宙を創造した人格神を信じるには、第一に五感による証拠の吟味が必要であると論じる。

もし神が我々に現れて、神が我々の感覚に彼の存在を確信させれば、この啓示は必然的に信仰に傾く。このように神が現れた人々は、神の存在について可能な限り最も強い確信をもつ。しかし、神学者たちの神はどこかで目に見えるように現れることはありえない。<sup>9</sup>

第二には理性である。ある主張が正しいかどうかは、理性が判断する。宇宙は神によって創造されたのか、それとも永遠の昔から存在するものか、ということを考える際も、決めるのは理性である。

二つの主張が正反対で対極にある場合は、心は最も不可解でない方を信じる。つまり、宇宙を創造することが出来る、宇宙の限界を超えた存在を考えるよりも、宇宙は全くの永遠の昔から存在したと考える方がやさしい。<sup>10</sup>

第三に、神の存在を証明する証言が大切である。

神が人々の感覚に神の存在を確信させるという証言は、もし我々の心が、これらの人々が騙されたというより、神が彼らに現れたということの方が、本当でありそうだと考えた場合にのみ、我々によって認められうる。我々の理性は、彼らが奇跡の目撃証人だと宣言するだけでなく、神は不合理なものであると宣言している人々の証言は決して認め得ない。というのも、神は信じられることを要求し、信仰に対しては最高の報いを、不信仰に対しては永遠の罰を提案した

からだ。我々にできるのは、ただ自発的な行動を要求することのみである。信仰は意志の行為ではない。心は受動的ですらある。あるいは、心ならずも積極的である。このことから、我々が十分な証言を持たないことは明らかである。あるいは、むしろ証言は神 (a God) の存在を証明するのに不十分であり、それは理性から引き出せないことを上で示した。それで、感覚の証拠によって確信させられた者のみが、それを信じることができる。<sup>11</sup>

シェリーによれば、神はあくまでも仮説であるので、神の実在を証明するためには、神を五感で感じる必要があるが、神学者の説く神は目に見えるように現れることもない。また、証言は理性に反した不合理なものであってはいけませんが、神が宇宙を創造したと考えるよりも、宇宙がはるか昔から存在していたと考える方が合理的である。それゆえに、シェリーは迷信にすぎない神を信じるよりも、合理的な思考に基づく無神論の方が社会にとって有益だと考える。

このようなシェリーの無神論は理性と知性に訴え、また自由を愛する者にとっては魅力的なものであった。疾風怒濤の時期に、ブラウニングがこの無神論に引かれたのも無理はないように思われる。

### 第3章 「太陽を踏むもの」としてのシェリー

次に、『ポーリーン』におけるシェリーという存在の意義について論じていこう。上で述べたように、“Sun-treader”（「太陽を踏む者」）という呼称がシェリーを表していることに対しては批評家たちの意見は一致しているが、この呼称はどのような意味合いを持つものであろうか。まず、この呼称が現れる最初の箇所を引用しよう。

Sun-treader—life and light be thine for ever;  
 Thou art gone from us—years go by—and spring  
 Gladdens, and the young earth is beautiful,  
 Yet thy songs come not—other bards arise,  
 But none like thee—they stand—thy majesties,  
 Like mighty works which tell some Spirit there  
 Hath sat regardless of neglect and scorn,  
 Till, its long task completed, it hath risen  
 And left us, never to return: and all  
 Rush in to peer and praise when all in vain.

(ll. 151-61)

太陽を踏む者よ、生命と光は永遠にあなたのものであれ！  
 あなたは私たちから去ってしまった。  
 年月は流れ去り、春は喜び、若い地面は美しい。  
 だが、あなたの歌は出てこない。  
 他の詩人が立ち現われる。  
 しかし、あなたに似た人はいない。



無視と嘲りにもかかわらず、ある霊が、  
 その場に留まり続けたことを物語る力強い作品のように、  
 あなたの威厳ある業績は聳え立っている。  
 ついに、霊は息の長い仕事を完成して、立ち上がり、  
 私たちのもとを離れ、再びもどることはない。  
 それから、皆が突入して来て、  
 じっと見つめて賛美しても、全ては空しいのだ。  
 あなたの過去の存在がまだ残っていて、  
 大気は明るいように見える。

この“Sun-treader”（「太陽を踏む者」）という呼称が持つ意味合いについて、『ポーリーン』のオックスフォード版は、アイスキュロスの『縛られたプロメシウス』151行：「炎のように燃える夜明けに向かって、太陽を踏みつけて」を引用して、これを参照するように促した後、「こうしてシェリーは夜明けとなる」と付け加えている。<sup>12</sup>これに対して、ロングマン版の編者は、アイスキュロスの引用は適切だが、そのあとの付け加えの言葉は間違いだと指摘して、その理由を以下のように述べている。

イメージは夜明けを踏みつける太陽としてのシェリーであろう。他の解釈は、イメージは太陽を踏みつけている、つまり、太陽に勝利しているシェリーのイメージであろう。シェリーの使う‘tread’の意味は、「踏みつける、輝きを失わせる（顔色なからしめる）」の意味を持っている。例えば、『生命の勝利』382-90行。ブラウニングはまた、アポロが太陽神、詩歌の神としてヒュペリオンにとって代わる、キーツの『ヒュペリオン』や黙示録19章17節：「そして、私は天使が太陽の中に立っているのを見た」を思い起こしているのかもしれない。<sup>13</sup>

この注釈が例として挙げられているシェリーの『生の勝利』の該当部分には、「東の敷居の上で、日が夜のランプを踏みつけているように」（“As Day upon the threshold of the east / Treads out the lamps of night”, ll. 389-90）という表現があるが、これはより強い光を放つ太陽が夜の星々を踏みつけ凌駕するイメージである。ジョーゼフ・アーノルド(Joseph Arnould)は、『ポーリーン』は「シェリーがブラウニングの神様であった時に」書かれ、出版されたと言っているが、輝く朝の太陽をも凌駕する強烈な光であるシェリーの姿が、この「太陽を踏む者」という呼称に現れている。<sup>14</sup>ブラウニングがシェリーの作品に出合った時、シェリーはすでに亡くなっていたが、「太陽を踏む者」としての強烈な光の余韻はまだ残っていて、周りの大気も輝いて見えた。

このように、シェリーという存在は、ブラウニングにとって唯一無二のものであり、余人をもって代えがたいものであった。シェリーのような詩人は他にいない。その上、自分は多くの人々がシェリーを認めていない時から、評価していたという強い自負心があった。221行目には“I was thine in shame.”という難解な詩行があるが、“in shame”についてロングマン版は「シェリーの天賦の才が認められず、無神論と不品行のゆえに攻撃された時期に」という意味であると注釈を付けている。<sup>15</sup>この注釈を考慮に入れると、この詩行は「あなたが辱められている時も、私はあなたの賛美者であった」と解釈できるだろう。シェリーは過激な無神論や不道徳な生活のゆえに世間から責められることが多かったが、そのような時にも、語り手はシェリーの詩人としての価値を高く評

働いていた。それゆえに、時間がたってシェリーが世に認められるようになった時、複雑な感情であった。つまり、シェリーは自分だけのものだと思っていたので、多くの人のものになってしまったのは、恋人を取られたようで、少し寂しい思いがする。この人は、実際には「人類にとって星」(l. 171) のような存在であっても、語り手にとっては、どこまでも独り占めにしたい存在である。さらに、「太陽を踏む者」という表現が出てくる2番目の箇所を引用する。

And I, perchance, half feel a strange regret,  
That I am not what I have been to thee:  
Like a girl one has loved long silently,  
In her first loveliness, in some retreat,  
When first emerged, all gaze and glow to view  
Her fresh eyes, and soft hair, and lips which bleed  
Like a mountain berry. Doubtless it is sweet  
To see her thus adored—but there have been  
Moments, when all the world was in his praise,  
Sweeter than all the pride of after hours.  
Yet, Sun-treader, all hail!—from my heart's heart  
I bid thee hail!—e'en in my wildest dreams,  
I am proud to feel I would have thrown up all  
The wreathes of fame which seemed o'erhanging me,  
To have seen thee, for a moment, as thou art.

(ll.191-205)

そして、おそらく、私はあなたに対して、  
今は昔と違っていることに奇妙な半ば後悔の念を感じている。  
あたかも、ある人が、隠れたところで、初心な愛らしい少女を  
長く静かに愛していたが、彼女が初めて世に現れると、  
その新鮮な目、柔らかい髪、山苺のような赤い唇を、  
皆が見つめ、皆が身を熱くするように。  
彼女がこのように崇められているのを見るのは、  
疑いもなく嬉しいことである。  
しかし、彼の賛美が彼女にとっては全世界であった時、  
その賛美は、後で湧き上がる賛美から得られる全ての誇りよりも甘味であった。  
しかし、太陽を踏む者よ！万歳！  
私の心の底から、あなたに喝采を送る。  
私の最も荒々しい夢の中でさえ、  
一瞬でもあなたの有りのままの姿を見るためには、  
私の上に覆いかぶさっているように見えた名声の花冠の全てを、  
投げ捨てたであろうことを感じて、誇らしく思う。



隠れた所から秘かに愛らしい少女を見つめていた若者にとって、彼女が多くの人に称賛されるようになると、うれしいと同時に寂しくもある。たとえ夢の中で、一瞬でも「あなたの有りのままの姿」(l. 205)を見るためには、すべての名声を捨てても構わないという切実な感情を初々しく表現している。

## 第4章 『ポーリーン』に見るシェリーの影響

### 第1節 シェリーの理想主義の影響

#### (1) 理想主義の受容

上述のように、『ポーリーン』の語り手は「太陽を踏む者」を心の底から称賛しているが、シェリーに対する「熱狂のあまり、彼はシェリーのひどく急進的な政治横領を採用した」のであった。<sup>16</sup> この熱狂ぶりは、次の詩行によく表現されている。

・ ・ ・ ・ I was vowed to liberty,  
Men were to be as gods, and earth as heaven.  
(ll. 425-6)

私は自由のために献身した。  
人々は神々のように、地上は天上のようになるべきであった。

語り手は自由を愛する魂であり、今や自由を守るために身を捧げ、全ての抑圧から解放される世界の実現を期待している。人類を「神々」の姿に完成させ、地上に天国を実現するという理想にも『クイーン・マップ』の影響があると考えられる。このような理想的未来像が、『クイーン・マップ』の中に具体的に描かれているからである。

『クイーン・マップ』では、第二歌の後半に人類の過去の誤り、第三歌から第七歌までは人類の現在の誤りを描き、最後に、第八歌と第九歌は未来の革新と歓喜を扱っている。過去と現在は苦悩に満ちていたが、未来においては理想の世界が地上に現れる。

・ ・ ・ ・ 人は以前には  
たちまちの間に忘却される幻の如く速く、  
一時の舞台を走り過ぎたのだが、  
今やこの世で不死の身となる。  
(第八歌、ll. 209-11)

ここに描かれているのは、文字通り地上が天国のようになって、人間は「不死の身」となるユートピアである。また、人間は肉食をしなくなるので、動物の血が流されることはなく、鳥も人間を恐れない。人間は恐怖の行使権を捨て、万人が対等の仲間と共に差別なく暮らす。

「おお、幸福なる『大地』よ！『天国』の実現よ

絶えず人間界に群がり過ぎる、休みなき魂の  
 憧れの地よ！御身、全人類の希望の成就よ！  
 御身、無意識に働く意志の克ち得た  
 輝かしき報よ！御身より発散する幾筋もの光線は  
 全時間、全空間に行き渡り、  
 唯一の焦点に向い、そこで永久に融合する。  
 御身、清らかなる極みの精神の清らかなる住所よ！  
 一そこには不安・悲哀・無能・犯罪・  
 倦怠・疾病・無知なんぞ入り込めぬ。  
 おお、幸福なる『大地』よ、『天国』の実現よ！  
 (第九歌、ll. 1-11)

## (2) 理想主義からの脱却とその結果

前述のように、語り手はシェリーの思想に共鳴するあまり急進的な思想を持ち、この世が天国となることを願うようになった。しかし、結局シェリーの理想論についていけなかった。それは何故なのだろうか。

Remember me—who praise thee e'en with tears,  
 For never more shall I walk calm with thee;  
 (ll. 219-20)

涙をもってでさえ、あなたを讃える私を覚えていて下さい。  
 私はこれ以上、あなたと共に穏やかに歩くことはしないからです。

『ポーリーン』の語り手は、シェリーが語る未来の喜びに陶酔し、理想的状態が地上に出現することを夢見ていたが、やがて夢から覚めたように、「それは美しいかったが、夢に過ぎなかった」(ll. 449-50) と思うようになる。そのような観念的な理想では本当の人生はつかめないのが、現実の人生を学ぶことが必要だと思い、その理論を捨てた。喜びと悲しみが交差する現実社会の姿を捉えることが大事だと感じたからである。

'Twas in my plan to look on real life,  
 Which was all new to me; my theories  
 Were firm, so I left them, to look upon  
 Men, and their cares, and hopes, and fears, and joys;  
 (ll. 441-4)

現実の人生を、私にとってまったく目新しい人生を見る事は、  
 私の計画の中にあった。  
 私の理論は堅固であった。  
 それで、人類とその心配、希望、恐れ、苦痛と喜びを見つめて学ぶために、

私は理論を手放した。

こうして、この世を天国して人類を完成させるという理想を捨て、この世の現実を知ろうとしたが、限りある身の人間には、この世の現実を全て体験して知ることは不可能であると実感する。しかし、いつの間にか人類への愛や同情も無くなっていた。

First went my hopes of perfecting mankind,  
And faith in them—then freedom in itself,  
And virtue in itself—and then my motives' ends,  
And powers and loves; and human love went last.  
(ll. 458-61)

最初に、人類を完成させるという私の希望が去って行った。  
そして、それらの希望に対する信頼が、  
次に、自由それ自体と美德それ自体への信頼が、  
それから、私自身の動機の目的、  
そして力と愛が去り、  
最後に人間としての愛が去った。

このような状態にあっても自己に閉じこもることがなかったのは、苦しみにある者への同情であった。特に現在も奴隷状態に置かれている人々への同情がある。人類を完成させ、地上を天国にするという理想主義的希望に幻滅して、この世の現実の姿を見ようとした話し手であったが、そこにも挫折があった。死ぬべき肉体をもった人間は、この世の全てを知ることはできない。それが嵩じて、ついには人類への無関心になり、利己的になっていく。それはカーライルの「無関心の中心」と似たような状態だと考えられるが、そのような中でも自由を愛する思いは消えていなかった。

And thus it is that I supply the chasm  
'Twixt what I am and all that I would be.  
But then to know nothing—to hope for nothing—  
To seize on life's dull joys from a strange fear,  
Lest, losing them, all's lost, and nought remains  
. . . . .  
There's some vile juggle with my reason here—  
I feel I but explain to my own loss  
These impulses—they live no less the same.  
Liberty! what though I despair—my blood  
Rose not at a slave's name prouder than now,  
And sympathy obscured by sophistries.  
Why have not I sought refuge in myself,  
But for the woes I saw and could not stay—

And love!—do I not love thee, my Pauline?

(ll. 676-89)

そして、私は現在の姿と、  
自分になりたい全てのもの間にある裂け目を、  
このようにして埋める。  
しかし、その場合は何も知らず、何も希望しない状態になる。  
人生の退屈な喜びを失ったら、全てが無くなり、  
後に何も残らなくなつては困るという、  
奇妙な恐れから、人生の退屈な喜びを捉えるようになる。

ここで、私の推論の力については、何か邪悪なごまかしが仕掛けられる。  
私は自分自身の喪失についても、  
これらの衝動を説明するだけだ、と感じる。  
これらの衝動は喪失にもかかわらず、以前同様に生きている。  
自由だ！私が絶望したとしても、それが何なのか。  
奴隷という名前を聞くだけで、  
また、詭弁によって曇らされた同情を思うだけで、  
私の血が、今ほど誇らしげに高まったことはなかった。  
自分の内側に避け所を求めて、閉じこもることをしなかった理由は、  
私が見ていながら、止めることができなかつた人々の苦しみに他ならない。  
そして、それは愛だ！  
私のポーリーンよ、私はあなたを愛していないのだろうか。

上の引用中の“at a slave’s name” (l. 685) という表現は解釈が困難であるが、オックスフォード版の注釈にあるように、「奴隷制が存在すると考えただけでも」と理解するのが最適と思われる。<sup>17</sup> 自由の精神に基づき、人の自由を奪う奴隷制に対して今ほど義憤を感じたことはない。そして、そのような義憤を感じる自分を誇らしく思っている。苦境にある人々への同情が、自分の世界に閉じこもることから語り手を守っていた。

一方、シェリーは理想の平等社会を実現するための「世界革命」への情熱を有していたので、当然の如く奴隷制反対の立場であったが、その態度は、すでに『クイーン・マップ』に現れている。奴隷制度がいかに人間を破壊し、祖国を汚すものであるかを強調している。

地震・嵐・疫病にさんざ見舞われし大地でも、  
『人間』は劣らず賤しき存在だった。  
奴隷制度は『人間』を押し潰し、血に汚れし  
祖国の塵と化した。『人間』は、また、権力の名声と  
引き換えに売り渡された。身を売って得た  
この名声は内なる衝動をことごとく破壊し、  
人の意志をも商品とした。また、キリスト教徒の間では  
『人間』は黄金と引き換えに売られ、遠き島々へと

引き摺られていった。その鳥々で『人間』は絶えず  
肉に食い込む鞭の音に駆られて苦役を強いられ、  
全てを墮落さす奢侈と富を蓄積させられる、—

(第八歌、II.170-80)

また、奴隷制に対するシェリーの立場は、『ロザリンドとヘレン』(*Rosalind and Helen*, 1818年)の中にもよく表れている。<sup>18</sup> この詩に登場するライオネルは、疑いもなくシェリーの姿をモデルとして使っている。貴族出身のシェリー同様に、ライオネルは高貴な出自でありながら社会の中で苦しむ人たちに強い同情を感じている。このように恵まれた高貴で裕福な家柄でありながら、既存の法律に抗議しているのは、大変珍しいことである。

・ ・ ・ ・ 耳を通して、彼の舌の持つ  
靈妙な魔力が、世界の奴隷制度を牛耳る黄金を  
握る人びとの心の扉を開けたのです。  
自らが決して刈り取ることなき種子を蒔く  
この人を見て、人びとは驚きの目を見張り、  
或る人びとは冷笑しました。何故ならば、  
噂では、彼は金持で、若くて、その気になれば、  
奢侈の限りを尽くすことが出来たからです。

(II. 651-8)

地上が天国のようになるという空想的理想論は脱したが、奴隷制反対というところではやはりシェリーの影響を受けていた。苦境にある人々に対する同情から、奴隷制に義憤を感じる「衝動」は愛と言えるのではないか。そして、この衝動が暗示している愛ならポーリーンに対して持っているのではないか。シェリー流の理想主義を捨てたはずのブラウニングであったが、シェリーから完全には逃れることができなかったと言えよう。

## 第2節 語り手の見せかけの老化

『ポーリーン』の語り手とシェリーの間には、深奥から突き上げる旺盛な知識欲という共通点がある。

I am made up of an intensest life,  
Of a most clear idea of consciousness  
Of self—distinct from all its qualities,  
From all affections, passions, feelings, powers;  
And thus far it exists, if tracked in all,  
But linked in me, to self-supremacy,  
Existing as a centre to all things,  
Most potent to create, and rule, and call

Upon all things to minister to it;  
 And to a principle of restlessness  
 Which would be all, have, see, know, taste, feel, all—  
 This is myself; · · · ·

(ll. 268-79)

私は最も強烈な生命からなっている。  
 自己のすべての性質とは区別される、  
 自己に対する意識の最もはっきりとした考えから成っている。  
 全ての愛情、熱情、感情、力からも区別されて。  
 そして、もし跡を辿れば、それは全ての人の中に、  
 ここまで存在しているが、私においては自己至上と結びつき、  
 全てのものへの中心として存在する。  
 それは全てのものを創り、支配し、  
 全てのものに自分に仕えるように要求するのに、最も力強い。  
 全てとなり、全てを持ち、見て、知り、味わい、  
 感じる休むことを知らぬ心の原理と結びつく。  
 これが私自身である。

語り手は強烈な自意識を持ち、また全てを持ち、見て知りたいという熱に燃やされていた。どこまでも自己中心的な立場にある語り手は、「自然の魔法」の知識をも会得していたようだ。

Nature would point at one, whose quivering lip  
 Was bathed in her enchantments—whose brow burned  
 Beneath the crown, to which her secrets knelt;  
 Who learned the spell which can call up the dead,  
 And then departed, smiling like a fiend  
 Who has deceived God. · · · ·

(ll. 18-23)

自然は、震える唇が自然の魔法に浸り、  
 自然の神秘も屈服する冠を被り、  
 その下で額が燃えている者を指し示すだろう。  
 その者は死者を呼び出せる呪文を学び、  
 その後、神を欺いた悪魔のように笑いながら去っていく。

ここで語り手は死者の霊を呼び出す呪文という、黒魔術の秘儀にも通じていたことが暗示されているが、この点でもシェリーとの共通性がある。シェリーの『アラスター』の中にも同様の経験が描かれている。



計り知れない世界の母よ！

私の厳かな歌を嘉してください。

私は常にあなたを、あなただけを愛してきたからです。

私はあなたの陰を、足跡の暗闇を見つめてきました。

私の心はあなたの深い神秘の深みを見つめています。

私は遺体安置所の中の棺の上に、床を設けたが、

そこでは黒い死があなたから勝ち取った戦利品の記録を保存している。<sup>19</sup>

(ll. 18-25)

上の引用にある「計り知れない世界の母」とは自然の女神を意味するが、語り手はこの母への祈願の中で、自分が自然の神秘を見つめてきたと語る。そのような神秘的知識を求める熱情に駆られて、シェリーは「若い頃、実際、教会の墓地や地下納骨所で、幽霊を探したり、悪魔や死者の霊を呼び出そうとした」のである。<sup>20</sup>

このように世界のあらゆる知識を求めようとする中で、語り手はだんだんと衰弱していく自分を見出し、あたかも自分が高齢であることを自覚しているような記述がある。その結果、語り手の告白を素直に読んでいくと、それは語り手がある程度の年配であるように見えてくる。この作品は、ブラウニングの自伝的な作品とも目され、ブラウニング自身が、語り手は『ポーリーン』の冒頭に置かれたコルネリウス・アグリッパのラテン語の一文の最後に、「ロンドン：1833年1月」(London: *January* 1833.) と記した後に、“V. A. XX”と付け加えている。“V. A.”は‘Vixi annos’の略であり、“XX”は20を表すローマ数字であるので、この付記は「私は20歳である」(‘Vixi annos viginti’) という意味になる。実際、『ポーリーン』はブラウニングが20歳の時に出版されたので、著者の伝記的要素が強い作品である『ポーリーン』の語り手も20歳であると考えるのが普通であろう。それに関わらず、一部の批評家は、語り手がかなりの年配であると考えている。特に、この詩の結末部分、すなわち、三度目に「太陽を踏む者」に呼びかけた個所について、ここで語り手自身が死につ

つあると考える者もいる。

この点を考察するため、最初にこの部分を引用してみよう。

Sun-treader, I believe in God, and truth,  
 And love; and as one just escaped from death  
 Would bind himself in bands of friends to feel  
 He lives indeed—so, I would lean on thee;  
 Thou must be ever with me—most in gloom  
 When such shall come—but chiefly when I die,  
 For I seem dying, as one going in the dark  
 To fight a giant . . . .

(ll. 1020-7)

太陽を踏む者よ、私は神と真理と愛を信じる。

ちょうど死から逃れてきた者が、

友達の輪の中に自分を結び付けて、

自分が本当に生きていることを感じるように、  
 そのように、私はあなたに頼りたい！  
 あなたはずっと私と共にあらねばならぬ。  
 特に暗がりが出て来た時には、  
 とりわけ私が死ぬ時に。  
 死んでいく時には、  
 私には、自分が巨人と戦うために暗がりの中を進む者のように、  
 思われるからだ。

この引用の中の“*For I seem, dying*” (l. 1026) という表現に対して、オックスフォード版は注釈をつけて、この詩行は語り手が現在死につつあるという意味でなく、将来死に臨んだ時のことを予測しているのだと指摘している。<sup>21</sup> このような注釈が必要な理由は、上述のように、ある批評家たちは『ポーリーン』の語り手は20歳の若者ではなく、もっと高齢であると主張しているからである。例えば、マイケル・ハンチャー (Michael Hancher) は「ブラウニングの『ポーリーン』における劇的狀況」(“*The Dramatic Situation in Browning’s ‘Pauline’*”) という論文の中で、ブラウニングの語り手は60歳には達していないが、「少なくとも中年には達している」と主張する。<sup>22</sup> そして、語り手がある程度年配であることを示す最も明確な根拠として、次の詩行を挙げている。

As life wanes, all its cares, and strife, and toil,  
 Seem strangely valueless, while the old trees  
 Which grew by our youth’s home—the waving mass  
 Of climbing plants, heavy with bloom and dew—  
 The morning swallows with their songs like words,—  
 All these seem clear and only worth our thoughts.  
 So aught connected with my early life—  
 My rude songs or my wild imaginings,  
 How I look on them—most distinct amid  
 The fever and the stir of after years!

(ll. 131-40)

命が衰えてくると、  
 人生のあらゆる心配、争い、骨折りは、  
 奇妙にも価値の無いもののように思われる。  
 一方で、若い頃、家のそばに育っていた老木、  
 花が咲き乱れ、露に重く濡れて、  
 上に上にと伸びる植物の揺れる塊、  
 言葉のような歌を囀る朝の燕、  
 これら全てはくっきりと美しく、  
 私たちの思いを向ける価値があると思われる。  
 それで、私の人生の初期と結びついたもの、

私の粗野な詩歌や荒々しい想像、  
 これらは後年の熱狂と大騒ぎの中で、  
 最も明白になるであろうろうが、  
 それらを私はどのように見るのか？

ハンチャーは、上の引用やその他の詩行から判断すると、「この詩の語り手は若く、情熱的なロバート・ブラウニングではなくて、すっかり疲労困憊した想像上の年輩の紳士である」と述べている。<sup>23</sup> さらにハンチャーは、先に引用した締めくくりの詩行 (ll. 1020-31) は、深刻な病気で伏している語り手が、「死に臨んで彼の告白を完結しよう」としたものであり、「死につつある人間の勝利の表現である」と主張している。<sup>24</sup> このような解釈をする批評家がいたために、上述のように、オックスフォード版の注が、この個所で語り手が死につつあるのではないと明言しなければならなかったのである。

このオックスフォード版の見解は妥当なものであると思われるが、一部の研究者たちが間違えるほどに、ブラウニングが語り手をかなりの年配のように描いたのはなぜであろうか。一つの理由としては、この詩の着想に関係がある。この詩の末尾に「リッチモンド / 1832年8月22日」(RICHMOND, /October 22, 1832.) と付記されているように、俳優エドモンド・キーン (Edmund Keen) が演じる『リチャード三世の悲劇』(*The Tragedy of King Richard the Third*) を見た時に、ブラウニングの胸に『ポーリーン』の着想が浮かんだ。「その時、彼はアルコール中毒と病気に損なわれていたが、その演技はブラウニングに強く影響を与えた。」<sup>25</sup> 語り手は、魂が荒れて、生命力が衰えていた時の自己の姿を、エドモンド・キーンの晩年の姿になぞらえようとした側面がある。

I will be gifted with a wond'rous soul,  
 Yet sunk by error to men's sympathy,  
 And in the wane of life; yet only so  
 As to call up their fears, and there shall come  
 A time requiring youth's best energies;  
 And straight I fling age, sorrow, sickness off,  
 And I rise triumphing over my decay.

(ll. 669-75)

私は驚くべき魂を与えられるだろうが、  
 私の過ちによって人々の同情を買うところまで、  
 再び生命の衰退へと沈まされるだろう。  
 だが、それはただ人々が心配するだけのことだ。  
 若者の最善のエネルギーを要求する時がくるであろう。  
 見よ、ただちに私は老年、悲しみ、病気を投げ捨てる。  
 そして、私は衰えに打ち勝って立ち上がる。

キーンの場合は、生命の衰退が世間の人々の同情を買うような段階にまで達していたようだが、語り手の見せかけの衰えは世人の心配するようなものでなく、ほどなくして抜け出せるものだと明言する

見せかけの老化のもう一つの理由としては、やはりシェリーの影響があると考えられる。知識へのあくなき探求のあまり、早期に年老いてしまう語り手の姿にはシェリーの『アラスター』の影響があると考えられる。『アラスター』の詩人はどこまでも理想を求め若くして衰弱していく運命にあるが、この点で『ポーリーン』の語り手に似ている。

『アラスター』の語り手は、想像力に火をつけられ宇宙のことを思うようになる。彼は知識の泉を深く飲んでいて、知的な渇きは癒えることがない。そこで、彼は「自分の着想の原型を探す」ために世界中を旅する。しかし、その探求の旅は人類との共感を伴わない自分中心のものであって、心を寄せる乙女に目もくれない。現実の人を愛するのではなく、夢で見たヴェールを被った乙女の姿を求めつつ遍歴の旅を続けるが、そのような彼はやがて早すぎる死を遂げる。

かつて一人の詩人がいた。

その人の時ならぬ墓は、敬虔な崇敬の念を持つ人の手なら建てることのないもので、

秋の風の魔法をかけられた渦は、腐って土になる骨の上に、

荒れ地で土になる葉っぱのピラミッドを作った、美しい若者である。

泣く花や願掛けの糸杉のリースで飾られた死を悼んでくれる女性もいない。

それゆえ、永遠の眠りの孤独な長椅子である。

優しく、勇敢で、気前の良い、

いかなる見捨てられた詩人も、自分の暗い運命に対して、

旋律の美しい溜息をつくことはなかった。

彼は孤独の中で生き、死に、歌った。

(II. 50-60)

自己中心的な探求のゆえに、年若くして衰え、ついには滅びに至った『アラスター』の詩人の姿は、『ポーリーン』の語り手の早すぎる老化にも影響を与えていると思われる。強烈な自意識のゆえに、ポーリーンを本当に愛することもない状態であった語り手は、早すぎる衰弱を感じていたのだろう。

### 第3節 シェリーの無神論の影響

#### (1) 無神論の受容と脱却

シェリーの『クイーン・マップ』やその注釈を読んでいると、信仰というものが人間性をゆがめ、むしろ無神論の方が社会の安定に寄与するように思えてくる。ブラウニングがふと内面を見ると、信仰が無くなっていた。青年期特有の既成のものに対する反抗心も加わって以前の信仰を失っていた。そのような影響が『ポーリーン』の語り手の次の言葉に現れている。

Thou lovedst me, and I wondered, and looked in

My heart to find some feeling like such love,

Believing I was still what I had been;

And soon I found all faith had gone from me,

(II. 578-81)

私は訝りつつ、そのような愛に似た感情を見つけるために

私の心を覗き込んだ。

私がまだ昔の自分だと信じて。

全ての信仰が私から去っていることが、すぐにわかった。

従来の信仰がいつの間にか無くなっていることに気づいた語り手は、さらに自分の魂の神殿の中で、神に取って代わった「暗い霊」を感知し、この神殿の中で崇められるのは自分自身であることに気づく。

My powers were greater—as some temple seemed  
 My soul, where nought is changed, and incense rolls  
 Around the altar—only God is gone,  
 And some dark spirit sitteth in his seat!  
 So I passed through the temple; and to me  
 Knelt troops of shadows; and they cried, “Hail, king!  
 “We serve thee now, and thou shalt serve no more!  
 “Call on us, prove us, let us worship thee!”  
 And I said, “Are ye strong—let fancy bear me  
 “Far from the past.”—And I was borne away  
 As Arab birds float sleeping in the wind,  
 O'er deserts, towers, and forests, I being calm;  
 And I said, “I have nursed up energies,  
 “They will prey on me.” And a band knelt low,  
 And cried, “Lord, we are here, and we will make  
 “A way for thee—in thine appointed life  
 “O look on us!” And I said, “Ye will worship  
 “Me; but my heart must worship too.” They shouted,  
 “Thyself—thou art our king!” So I stood there  
 Smiling . . . . .

(ll. 469-88)

私の力はより大きくなった。ある神殿が自分の魂のように思えて、  
 そこでは何も変わらず、祭壇の周りを香煙が立ち上っているときに、  
 神のみは居られず、  
 暗い霊がその座に座っている。

それで、私は神殿の中を歩いていき、すると、多数の陰が私に跪いた。

そして、それらは叫んだ。「王様、万歳！

私たちは今、あなたに仕えますので、

あなたはもうこれ以上、仕えることはありません。

私どもを呼び、試し、私たちにあなたを崇めさせて下さい」

それで、私は言った、「あなたたちは強いのか？

空想に命じて、私を過去から遠くに運ばせてくれ！」  
 するとまるでアラブの鳥が眠りから風においでするように、  
 私は運び去られた。  
 荒野、塔、森を越えて、私は穏やかになった。  
 そして、私は言った、「私はエネルギーを蓄えてきた。  
 それらは私を餌食にするだろう。」  
 すると、一団が低く跪いて、叫んだ。  
 「主よ、私たちがここにいます。  
 私たちがあなたの指定された人生において、  
 あなたのための道を作ろう！  
 ああ、私たちを見つめて下さい！」  
 そして、私は言った、「あなたは私を拝するだろう、  
 私の心も何かを拝すべきなのか。」  
 彼らは叫んだ、「あなた自身を拝してください。  
 あなたは私たちの王です。」  
 それで、私は笑いながら、そこに立っていた。

「暗い霊」とは、「神を欺いた悪鬼」(II. 22-3)のように神に対して反逆的で、自己中心の傲慢な精神状態を表していると言えよう。しかし、このような状態を通りながらも、やがてシェリーの無神論の影響を脱し、信仰を回復していく。その転換点は挫折の経験である。

それは人間という存在の限界を知ることであった。「私は不死ではないので、全ての喜びを味わう訳にもいかない。」(I. 810)という詩行に現れているように思われる。自分は死すべき肉体を持った人間であり、神ではない。このことを自覚した時に、自分自身を拝するような傲慢に耐えられなくなった。それゆえ、語り手はこの言葉の後に、「ああ、神よ、これらの世に認められようと奮闘する目的はどこに向かうのか。」(I. 811)と続ける。自分の力の限界を知った時に、自分を超越る存在に導かれたいという思いが湧いてきたからである。そして、自分の人生の背後に「一つの道標の星」(I. 292)が照らし続けていたことに気付く。

A mind like this must dissipate itself,  
 But I have always had one lode-star; now,  
 As I look back, I see that I have wasted,  
 Or progressed as I looked toward that star—  
 A need, a trust, a yearning after God,  
 A feeling I have analysed but late,  
 But it existed, and was reconciled  
 With a neglect of all I deemed his laws,  
 Which yet, when seen in others, I abhorred.  
 I felt as one beloved, and so shut in  
 From fear—and thence I date my trust in signs  
 And omens—for I saw God every where;



And I can only lay it to the fruit  
 Of a sad after-time that I could doubt  
 Even his being—having always felt  
 His presence—never acting from myself,  
 Still trusting in a hand that leads me through  
 All danger; and this feeling still has fought  
 Against my weakest reason and resolves.

(ll. 291-309)

このような心は自分で気をはらさねばならぬが、  
 私には常に一つの道標の星があった。  
 今、人生を振り返って見ると、その星を見上げながら、  
 時にはぐずぐずしつつも、進歩してきたのが分る。  
 神への必要、信頼、憧れ、その感情を私はつい最近、分析した。  
 それは存在していたのだ。  
 その感情は、私が神の法則とみなす全てのことを軽視することと、  
 折り合いがついていた。  
 だが、それが他の人の中に見えたときには、私は嫌悪した。  
 私は愛されている者、それ故、恐れから閉じ込められた者のように感じた。  
 その時から、徴と兆しを信じ始めた。  
 それはあらゆる所に神を見たからである。  
 常に神の臨在を感じ、決して自分から行動することなく、  
 全ての危険の中、私を導いてくださる御手に信じ、  
 この感情はずっと私の最も弱い理性、決意と戦って来たので、  
 私が神の存在でさえ疑うことがあり得るといふ事は、  
 悲しい未来の出来事に帰することができるのみである。

語り手は、シェリーの影響を受けて無神論者になっていたにも関わらず、宇宙に神の存在を直観的に感じる感性を持っていた。シェリーの場合、神を認めるためには五感による証明が必要である。しかし、神は物質ではないので五感で触れることはできない。一方、語り手は周りのあらゆるものに神の顕れを見て、神が人生の荒れた危険な状況の中でも、彼を導いていることを感じる。それは語り手の魂の直観に基づくものであった。制度的な教会の教えではなく、自己の個人的体験として神を信じるに至ったのである。そして、神の存在を疑うことは、今後の生涯では恐らくあり得ないと述懐する。そして、神に対する祈願を次のように告白する。

And what is that I hunger for but God?  
 My God, my God! let me for once look on thee  
 As tho' nought else existed: we alone.  
 And as creation crumbles, my soul's spark  
 Expands till I can say, "Even from myself

"I need thee, and I feel thee, and I love thee;  
 "I do not plead my rapture in thy works  
 "For love of thee—or that I feel as one  
 "Who cannot die—but there is that in me  
 "Which turns to thee, which loves, or which should love."

Why have I girt myself with this hell-dress?  
 Why have I laboured to put out my life?  
 Is it not in my nature to adore,  
 And e'en for all my reason do I not  
 Feel him, and thank him, and pray to him? Now.  
 Can I forego the trust that he loves me?

(ll. 821-36)

そして、私が飢え乾いて求めているのは神以外の何であろうか。  
 私の神よ、私の神よ、一度でいいから、私たちだけしか存在しないかのように、  
 あなたの御顔を仰がせてください。  
 そして、創造された肉体が崩れる時、私の魂の火花は拡大して、  
 ついにこう言うことが出来る。  
 「私自身からでさえ、私はあなたを必要とし、  
 あなたを感じ、あなたを愛している。  
 あなたへの愛のゆえに、  
 また、死ぬことのできない者のように感じることもなく、  
 ただ、あなたに立ち返り、愛し、愛すべき心が私の内にあるゆえに、  
 あなたの外なる業の中に歓喜を求めることはしない」と。

何故、私は地獄の服を身にまとって来たのか。  
 何故、自分の人生を消そうと努力してきたのか。  
 神を崇める事は、私の性質の中にあるではないか。  
 ともかく、私はまさに今、神を感じ、感謝し、神に祈らないだろうか。  
 神が私を愛して下さることの信頼を、私は捨てられるか。

語り手は、自らの魂が真に渴き求めているは何かに気付く。それは、他から教えられた神ではなく、自分自身が発見した神であった。今や、自らが「死ぬことのできない」神のような存在になるのではなく、死すべき肉体を持った人間として、神を愛し、また神に愛される関係に入ろうとしている。このような神に対する祈願は、やがて神の表現たるキリストに対する呼びかけに変わっていく。

Do I not feel a love which only ONE . . . . .  
 O thou pale form, so dimly seen, deep-eyed,

I have denied thee calmly—do I not  
 Pant when I read of thy consummate deeds,  
 And burn to see thy calm, pure truths out-flash  
 The brightest gleams of earth's philosophy?  
 Do I not shake to hear aught question thee? . . . .

If I am erring save me, madden me,  
 Take from me powers, and pleasures—let me die  
 Ages, so I see thee: I am knit round  
 As with a charm, by sin and lust and pride,  
 Yet tho' my wandering dreams have seen all shapes  
 Of strange delight, oft have I stood by thee—  
 Have I been keeping lonely watch with thee,  
 In the damp night by weeping Olivet,  
 Or leaning on thy bosom, proudly less—  
 Or dying with thee on the lonely cross—  
 Or witnessing thy bursting from the tomb!

(ll. 837-54)

唯一のお方の愛を私は感じていないのか。  
 ああ、あなたの青白い姿よ、とてもぼんやりと見えていて、  
 深い目をしている。  
 私は今まで、あなたを静かに拒否して来た。  
 私があなたの究極の業<sup>わざ</sup>について聖書で読んだ時に、  
 あなたの穏やかで純粋な真理の光が、  
 地上の哲学の最も明るい輝きに勝って煌めく姿を見ることを、  
 私は喘ぐように熱望しないのか。  
 何者かがあなたに尋ねるのを聞いて、身体を震わさないのか。  
 もし私が間違っているなら、私を救い、逆上させ、  
 私から力と喜びを取り上げ、私を長い間、死なせて下さい。  
 そうすれば、私はあなたに会えます。  
 私は罪、欲、驕りに、  
 まるで魔法をかけられたように繋がれていた。  
 しかし、彷徨う夢の中で、  
 奇妙な喜びの全ての姿を見てきたが、  
 しばしばあなたの側に立っていた。  
 私は、泣き声をあげるオリブ山の近くで、湿っぽい夜に、  
 あなたと一緒に二人きりで目を覚ましていた。  
 あるいは、ヨハネほど得意げではないが、  
 あなたの胸にもたれていた。

あるいは、寂しい十字架上であなたと共に死に、  
墓からあなたが出てくるのを目撃したりした。

上の引用で、「唯一のお方」とはイエス・キリストを意味する。語り手はいままでキリストを「静かに拒否」してきたのだが、いまはその「輝く姿」を見たいと願っている。そして、もし「罪、欲、驕り」に繋がれていた自分に間違いがあるのなら、自分を「長い間死なせて下さい。そうすれば、私はあなたに会えます。」と述べる。この言葉は理解が困難であるが、ロングマン版の注釈にあるように、クリストファ・マーロウ (Christopher Marlowe) の『フォースタス博士』 (*Doctor Faustus*) 5幕2場179-80:「ファウストを地獄に千年、いや10万年生かしておいて、ついには救われるようにしなさい」と比較すると分かりやすい。<sup>26</sup> 自分の魂に間違った点があるなら、いっそ長い期間、魂を死んだ状態に置き、その間に魂を浄化して、あなたの姿を浄められた魂の目で見させて下さい、との祈願であると思う。

このような祈願はなお発展して、福音書の出来事の追体験の記述に至る。「ルカによる福音書」の中で、イエスは、捕縛される前にオリブ山の麓のゲッセマネの園で夜を徹して祈り、「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」(22章42節)と苦しみもだえて切に祈った。その時、「汗が血のしたたりのように地に落ちた」(同44節)と記されている。弟子たちは、「誘惑に陥らないように祈りなさい」(同40節)と言われていたが、悲しみと疲労のあまり眠ってしまった。しかし、語り手は「あなたと一緒に二人きりで目を覚ましていた」と語りかける。その上、「ヨハネによる福音書」において「イエスの愛しておられた者」(13章23節)と呼ばれ、最後の晩餐の時、キリストの胸近くの座についていた使徒ヨハネほど得意げではないが、キリストの胸にもたれ、また、十字架上で共に死に、キリストの復活を目撃したと述懐する。福音書の記事を自らの魂の中で追体験し、また福音書には書かれていない復活の姿まで目撃するという神秘的宗教体験をする。これは語り手の魂が死の状態から生命の中に復活する体験でもあったと思われる。

## (2) シェリーへの信仰回復宣言

この詩の終末で、語り手は「しかし、今や、/ 私は昔存在したような、祭司にして愛する者になるであろう」(“but now / I shall be priest and lover, as of old.”, ll. 1019-20)と語る。「愛する者」とは「真に愛を知るもの」、あるいは、「真の愛を知る者」の意であろう。このような境地に達した語り手は、今や「太陽を踏む者」に対して無神論からの回復を宣言する。一部重複するがもう一度引用する。

Sun-treader, I believe in God, and truth,  
And love; and as one just escaped from death  
Would bind himself in bands of friends to feel  
He lives indeed—so, I would lean on thee;  
Thou must be ever with me—most in gloom  
When such shall come—but chiefly when I die,  
For I seem dying, as one going in the dark  
To fight a giant—and live thou for ever,

And be to all what thou hast been to me—  
 All in whom this wakes pleasant thoughts of me,  
 Know my last state is happy—free from doubt,  
 Or touch of fear. Love me and wish me well!

(ll. 1020-31)

太陽を踏む者よ、私は神と真理と愛を信じる。  
 ちょうど死から逃れてきた者が、  
 友達の輪の中に自分を結び付けて、  
 自分が本当に生きていることを感じるように、  
 そのように、私はあなたに頼りたい！  
 あなたはずっと私と共にあらねばならぬ。  
 特に暗がりが出て来た時には、  
 とりわけ私が死ぬ時に、  
 死んでいく時には。  
 私には、自分が巨人と戦うために暗がりの中を進む者のように、  
 思われるからだ。  
 しかし、あなたは永久に生きてほしい。  
 あなたが私に対してそうであったように、  
 全ての人にそうであってほしい。  
 この詩を読むと、その心の中に、  
 私についての楽しい思いが甦える人は皆、  
 私の最後の状態は、疑いや少しの恐れから自由になり、  
 幸せだと知っている。  
 愛してくれ、そして私の幸福を祈ってくれ。

「太陽を踏む者」たるシェリーに対して、語り手は「私は神と真理と愛を信じる」と高らかに明言したにも関わらず、未来に来るであろう死に際しては、シェリーの助力を求めたい気持ちを表明している。ここに、「自分が巨人と戦うために暗がりの中を進む者のように」感じられるとあるが、「巨人」とは、ブラウニングが「プロスピシー（展望せよ）」（‘Prospice’）の中で、「恐怖の巨魁」（“the Arch Fear,” l. 7）と表現したものであり、「死そのもの」であるとともに「死の恐怖」をも意味している。将来、自分が死と直面する時に、永遠に生きているシェリーに助力を求めたい気持ちは、シェリーの『クイーン・マップ』を読むとよく理解できる。先述のように、『クイーン・マップ』第八歌と第九歌は未来において実現される理想的ユートピアを描いているが、同時に「死は恐れるべきものではない」という主張を展開している。『クイーン・マップ』第九歌には、次のような死に関する詩行がある。

死とは暗くて侘しき<sup>かど</sup>門ではあるが、  
 永遠の希望に充ちた空色の鳥々、  
 輝かしき空、幸福の地へと通じる所だ。

だから、おお、『魂』よ！恐れずに進めよ、—  
 たとい、嵐が桜草の茎に花を吹き千切ろうと、  
 霜が瑞々しく咲きだしたばかりのその花を萎らそうと、  
 『春』の微風は万物を目覚まし、大地に愛を求めて息吹き、  
 そのお気に入りの花をば心地よき極みの露で養う、—  
 その花が養われて苔むす堤や暗き谷間に咲き匂えば、  
 陽に輝くその微笑で緑なす林をば明るく照らすのだ。  
 「だから、『魂』よ、そなたを肉体から引き離さんとする  
 『死』の手を恐がる必要はない。— その手は、暴君が  
 目覚める時にこそ、頑迷者のかかげる地獄の松明が  
 赤々と燃える時にこそ、大いに歓迎さるべきものなのだ。  
 『死』とは暗き小一時間の船旅に過ぎず、不安な眠りに  
 感ずる、はっと落ち込む一時の気持ちに過ぎぬのだ。

(第九歌、ll. 161-75)

シェリーの妻メアリーは『クイーン・マップ』に寄せた注釈の中で、「健康不良のため、シェリーは自分の人生のレースはすぐに走り終えられ、余命はあと一年か二年だろうと信じていた。これらの年月が有益で輝かしいものであるように彼は願った」<sup>27</sup>と述べているように、シェリーは若いころから病弱で死を強く意識していた。そのため、人々が愛し、愛される理想社会の実現のために残された時間を人一倍有意義に使うとしていた。死とは人間の魂を肉体から引き離すだけのものであり、決して恐れることはない、なぜなら魂は永遠に生き続けるからだ、と主張するシェリーの言葉には、死の恐怖に怯えている者たちを励まし希望を与える力がある。『ポーリーン』の語り手は、シェリーに対して「あなたの様な純なる者は、決して死ぬ事はない」と述べているが、いつか必ず来る自身の死に際して、永遠に生きているシェリーが傍にいて、疑いや恐れなく次の世界に行けることを願っている。

## 終わりに

ここまで『ポーリーン』におけるシェリーの影響を考察してきたが、この作品の中でシェリーが如何に大きな存在であるかが明らかになった。シェリーへの陶醉のあまり、「地上は天国のように」(l. 426) なるべきであるという過激な理想主義を信奉していた語り手であったが、やがてそのような理想は夢にすぎないとして捨ててしまう。しかし、同時に人類に対する同情や愛をもなくしてしまったのだ。それにもかかわらず、語り手が自己のなかに閉じこもらないでいられたのは、奴隷制への義憤であった。この義憤はシェリーの影響を受けていると考えられ、このことはシェリーの理想主義を捨てた語り手が、シェリーの理想主義を捨てた後も完全にはシェリーの影響を脱していないことを示している。

また、シェリーの無神論に影響されて一時期は信仰を失っていた語り手であったが、やがて信仰を回復し、他人から与えられた信仰ではなく、自らの内的な宗教体験を通して信仰の深化がなされていった。語り手は、この詩の結末で「太陽を踏む者よ、私は神と真理と愛を信じる」(l. 1020-2)と述べて、シェリーからの独立を宣言している。それにも関わらず、「太陽を踏む者」たるシェリー



に、将来自分が死の巨人と戦うときには、共にいて助けてほしいと願ったのは、やはりシェリーの影響を脱しきれなかったものと考えられる。それゆえに、「愛してくれ、そして私の幸福を祈ってくれ。」(l. 1031) というシェリーへの祈願でこの詩が終わっているのである。

### 注

1. 『ポーリーン』のテキストとしては、Ian Jack and Margaret Smith ed., *The Poetical Works of Robert Browning*, Vol. 1 (Oxford: Oxford UP, 1983) を使用した。この版は『ポーリーン』の1833年版と1888年版を並置しているが、1888年版はテキストの改訂が多くなされているため、元の1833年版を採用した。また、「プロスピシー（展望せよ）」のテキストとして、Ian Jack ed., *Browning: Poetical Works 1833-1864* (London: Oxford UP, 1970) を使った。さらに、『ポーリーン』のテキスト読解に当たっては、John Woolford and Daniel Karlin ed., *The Poems of Browning - Volume I - 1826-1840* (London and New York: Longman, 1991) を参照した。『ポーリーン』の日本語訳は全て著者の訳である。
2. 「詩歌を体現した存在」としてのポーリーンについては、吉門牧雄「詩歌を体現するポーリーン — ブラウニング作『ポーリーン』の研究 —」（『国際社会文化研究』第19号：高知大学人文社会科学部国際社会コース、2018年）の中の考察を参照してください。
3. Frederick A. Pottle, *Shelley and Browning: A Myth and Some Facts* (Hamden, Connecticut: Archon Books, 1965) 参照。
4. W. Hall Griffin and Harry Christopher Minchin, *The Life of Robert Browning* (London: Methuen, 1910) pp. 41-60を参照した。
5. W. Hall Griffin and Harry Christopher Minchin, p. 53.
6. シェリーの作品のテキストとして、Thomas Hutchinson ed., *Shelley: Poetical Works* (London: Oxford UP, 1967) を使用した。また、『クイーン・マップ』の日本語訳として、P.B.シェリー、高橋規矩訳『クイーン・マップ—革命の哲学詩—』（文化評論出版、1972年）を用いた。
7. Thomas Hutchinson, p. 826.
8. Thomas Hutchinson, p. 812.
9. Thomas Hutchinson, p. 813.
10. Thomas Hutchinson, p. 812.
11. Thomas Hutchinson, p. 814.
12. Ian Jack and Margaret Smith, p. 35.
13. Woolford and Daniel Karlin, p. 36.
14. Woolford and Daniel Karlin, p. 19.
15. Woolford and Daniel Karlin, p. 40.
16. Woolford and Daniel Karlin, p. 25.
17. Ian Jack and Margaret Smith, p. 77.
18. 『ロザリンドとヘレン』の日本語訳として、P.B.シェリー、高橋規矩訳『シェリー詩集 — ジュリアンとマツダロー、ヘラス、他 —』（溪水社、1992年）を使用した。
19. 『アラスター』の日本語訳は全て著者の訳である。
20. Donald H. Reiman and Sharon B. Powers ed., *Shelley's Poetry and Prose* (New York and London: Norton & Com, 1977) p. 71.
21. Ian Jack and Margaret Smith, p. 107.
22. Michael Hancher, "The Dramatic Situation in Browning's 'Pauline'", *The Yearbook of English Studies*, vol. 1, p. 151.

23. Michael Hancher, p. 151.
24. Michael Hancher, p. 157.
25. Woolford and Daniel Karlin, p. 68.
26. Woolford and Daniel Karlin, p. 80.
27. Thomas Hutchinson, p. 837.